



Rotary Opens Opportunities



Yamagata West Rotary

Rotary International District 2800

山形西ロータリークラブ会報

会長：佐藤 章夫 幹事：遠藤 正明

地区目標

「4つのテスト」を実践し ロータリーの価値をたかめよう。

クラブテーマ

Let's Make The Best Better 前へ!

◆点鐘：佐藤 章夫 会長

◆ロータリーソング：四つのテスト

◆司会：及川 善大 副S.A.A.

◆会場：パレスグランデール

第2903回例会

令和3年3月22日(月)

会長あいさつ

佐藤 章夫 会長



本日は山形市在住の作家、長岡先生のお話をお聞きする定例会でございます。私も大変楽しみにしてまいりました。また、イブニングクラブから、三澤会長はじめ、会員の方々もお出でくださり、心から歓迎いたします。

さて、オリンピックはどうなるのか、ハラハラドキドキしながら成り行きを見ておりますが、陸上競技の1万メートルのことで、私の偏屈な見方をお話します。1万メートル競走は、1周400メートルのトラックを25周するので、レース後半になってくると、先頭集団のランナーが最後尾の選手を追い抜いていきます。見ている人は、あと何周でゴールと知っていますので、先と後の区別はつきませんが、これをゴールのない競争だとすると、どうでしょう。先頭が最後尾になり、最後尾が先頭を走っていると見ることもできます。人の世はゴールのない1万メートル競争のようなものです。先頭を走っているつもりでも、いつの間にか、後続に抜かれて、下の順位に落ちていく。後続集団の中でやっと走っているようでも、時代の風向きが変われば、いつの間にか、先頭集団のトップにいる。最後尾が実はトップランナーだったということもあり得ます。

私の半世紀の農業人生でも、新農法、技術革新、新経営方式などなどがもてはやされては、いつの間にか忘れ去られるのを何回、繰り返したことでしょう。そのたび、トップランナーが登場して、マスコミの寵児となり、新しい時代の扉を開きます。そして消えてしまう。トップだったがゆえに、没落してしまった人たちもいます。

しかし一方、こういう人たちがいて、世の中が進歩するのも事実でございます。私の生きた時代の最強国はアメリカですが、今やその地位が揺らいできて、眠れる獅子だった中国が台頭してきました。アメリカが台頭する前は、産業革命をいち早く成し遂げたイギリスが7つの国を制していました。ヨーロッパ文明の礎を築いたギリシャ・ローマの威光は、とうの昔に消えています。

3代目は家を潰すとよく言われます。初代が創業して刻苦精励し財を築き、その背中を見て育った2代目はそれを守ろうとして一生懸命働き、3代目は生まれたときから大事にされ、おんが日傘で甘やかされて育つから、長寿でも先祖の財を保つ器量も気力もない。だから打算を知る。しかしこれは、今は不遇でも、人には必ず上昇するチャンス

が回ってくるとの励みだと私は思っております。同時に、「先頭にあっても、自戒せよ」「後塵を拝しても落胆するなかれ」との警句でもあります。「禍福はあざなえる縄のごとし」これが幸福寄与、人生なのだと思っております。

会員の皆さま、個々の人生も、事業も家業も、国家の隆盛・没落も、ゴール無き1万メートルと肝に銘じて、コロナ禍後の大変革に立ち向かっていこうではありませんか。もう今、大変革の最中なのかもしれません。

幹事報告

遠藤 正明 幹事

- 会員の武田朋広さんが、転勤されるということで、今日が最後の例会となります。ありがとうございました。会長より饞別がございませう。
- 本日の例会にあたり、山形イブニングロータリークラブさんから、寸志を頂戴してございます。ご報告をさせていただきます。大変ありがとうございます。
- 本日の食事ですが、今日の午前中の判断でしたので、皆さまにはお伝えすることができませんでした。例会修了後においしいお弁当を準備いたしましたので、是非、いい話を聞いた後に、家に帰ってから、お食事を召し上がっていただきたいなと思っております。連絡ができません、大変、申し訳ございません。
- 次回3月29日の職場訪問例会についてです。コロナに対する若干の変更点がございまして、皆さまには改めてFAXでご案内をさせていただきます。その話をしようと思ったのですが、まだ変更があるかもしれませんので、これについてはきちんと皆さんにご案内申し上げますので、よろしくお願いを申し上げます。

ニコニコBOX

〈3月22日〉

佐藤章夫会長／お話楽しみにしております

長岡弘樹先生のお話をもっともっと多くの聴衆で聞くはずだったのですが、諸般の事情でこのような形になりました。誠に残念です。

遠藤正明幹事／ようこそ

ようこそ、山形イブニングRCの皆さん。山形の誇り「長岡弘樹先生」の公園、楽しんでくだされば幸いです。



「創作の道草」

長岡 弘樹 さん

小説家推理作家

皆さん、こんばんは。物書きみたいな仕事をしていると、ずっと部屋にこもりっぱなしで、朝から晩までパソコンのキーを打っていると、ほっぺたが動かなくなるんですよ。全く他人との会話がないうちも3日も4日も、時には5日ぐらい誰とも話をしないということもあります。小説を書くのはちょっと上手くなったかもしれません。

小説家になってから18年ぐらい、今回のように講演会、いろんなところでやらせてもらいました。でも、ロータリークラブさんに招いていただいたのは、これが初めてだと思います。ロータリークラブって前からもちろん、その名称は知ってましたけれども、とても素敵だなあとずっと思っていました。

名前は本名です。今52歳69年生まれです。僕の『教場』というドラマに木村拓哉さんが主演してくださいました。住んでる所は、霞城公園のお堀端の城南町です。小さい頃は飯塚町に住んでました。本屋さんなんかもろくになくて、飯塚公民館の図書室ぐらいだったんですよ。高校生まではほとんど読書なんかしてませんでした。高校生までは漫画を描くこと、映画を見るのが大好きでした。映像のほうに将来は進みたいと思ってました。大学生だったのは、1980年代の終わり頃です。やれることと言えば、大学の近くの古本屋さんに行って、5冊で100円ぐらいの文庫本を買ってきて読むぐらいしなくてですね。そのおかげで、1日中ベッドに寝て転がって、仕方なく本を読んでいるうちに、「ああ、読書ってこんなに面白いのか」と、その時やっと分かりましたね。あっという間に読書の世界にのめり込んで、ものすごく好きになりました。ですから貧乏のおかげで本好きになれたので、ラッキーだったなと思ってます。

本好きが高じて作家になろうと思ったんですけど、小説を書く訓練を積まない限りはなれませんから。大学出た後は、山形に帰ってきて財団法人の開発公社に勤務しながら、小説の勉強少しずつ毎日やって、新人賞を受賞できたらなと思ってたんですけど、やっぱり2つ両立するのが難しく、30歳過ぎた頃に思い悩んだ末、退職してから、新人賞にチャレンジして、何とか賞を貰えて今に至ったと、そういう経歴です。

本題の「創作の道草」。今日お話したいのは、小説ってこうやって書くんだよという、小説家っぽい王道の講演会じゃなくて、その王道の道の脇に生えてる雑草みたいな、道草的な話をしたいなと思ってこういうタイトルにしました。自分が作家として仕事をしている上で体験したこと、感じたことの余談的なものをお話したいと思いますので、とにかくリラックスして聞いていただければいいことばかりをお話するつもりでいますので、ほんとに肩肘張らずに、耳を傾けていただければなと思っております。

この中で皆さんお仕事いろいろされていると思いますけど、恐らく製造業っていう分野の、食品ですとか工業製品ですとか、作って売るとい仕事をする方もいると思います。作家も言ってみれば製造業の1つなんですよ。しかし、普通の製造業と小説家には、1つのすごくおっきな違いがあるという人がいるんですよ。小説家は、自分の書いた本が書店に並んで、その本をお客さんが手にしてレジに持って、お金を払って買って行く。その一連の流れを作

家本人が見たと言う人がほとんどいないんだそうです。これは普通の製造業と小説家っていう製造業のおっきな違いだと、教えてくれた人がおりました。

僕は自分の本を誰かが買ってってくれたところを見たことがあるんですよ。本が一番売れてる『教場』だったんですけど、あれを買ってってくれた人がいましたね。60歳ぐらいの男性の方で、たまたま僕が自分の本あるなと思ったら、それをレジに持ってってくれた人がいたんですよ。あれを見た時はほんとに嬉しかったですね。それで、もう1回そういう思いしたいなと思って山形に帰ってきてから書店に行って、自分の本が並んでるのを、棚の陰からそっと見てたんですけど、何時間待っても誰も、買ってってくれませんでしたね。買ってもらうにはやっぱり、本当にもっともっと『教場』よりも売れるような、いい作品を書かないと駄目ですね。もっと精進したいなと、思っております。

もう1つ作家になって、良かったなと思ったことがあります。それは嫌な目、苦しい思いを体験した時に、ほんの少しぐらいは、「ああ良かったな」と思えるようになったことです。それはどういうことかということ、そういうしんどい思いが、自分の飯の種になるんですね、小説やエッセイにその体験を書けるぞと、ネタに困らないぞということなんです。ですから、今までよりは少し強く人生に立ち向かうことができるようになりました。これは小説家ならではの大きなメリットだと思います。やっぱり読者は、人が幸せになる話なんかあんまり読みたくないです。嫌な言葉ですけど「他人の不幸は蜜の味」、まさにその通りですね。

僕が体験した嫌な思い1つ、ぜひここで紹介させてください。高校1年生の7月頃。高校野球の予選があって、県の中山町のスタジアムで、山東とどっかの高校が戦うことになったんですよ。それで、野球部以外の全校生徒は応援に行けと駆り出されて、山形市から中山町まで10キロぐらいを自転車でスタジアムまで行きましたね。野球の試合が終わって、やっと家に帰れるぞと思って、自転車に乗ろうとしたら、困ったことにはパンクしてるんですね。自転車屋さんを探して球場の周りを一回りしてみたんですけど、ないんですよ。自転車押して、帰り道につきました。ところが、行けども行けどもやっぱり自転車屋さんの看板は見えてこないんですよ。ものすごくどんどん気温が高くなって、もう帽子1個だけです。だいぶ体調も悪くなってきて、このまま行き倒れになるんじゃないかなと思うような思いをしながら山形市の自宅目指して、早く自転車屋さんに行ってパンク直して、もうさっさと乗って帰りたいなと思いつつも、延々歩いたんですよ。結局、自転車押したまんま、歩いて帰るはめになりました。いやあ、あれはほんとにしんどい思いで、今でも忘れられません。

新人賞の受賞作『真夏の車輪』っていう作品のことちょっと触れてくださいましたけど、今、体験したことを小説にしたものなんですよ。ちょっとミステリーっぽい味付けしてますけれども。

ちょっと話題変えましょう。小説家になるといろいろインタビューとか受けるんですよ。新刊の本を出すと、本の宣伝がてらに、新聞社とか雑誌社の記者の方から。その時、よく受ける質問が、「どんな時にアイデアが出ますか」とか「どんな時に構想が進みますか」と、そういう質問が異常に多いです。僕の答えはもう大体決まってる、歩く。歩いてる時に一番、アイデアの発酵が進みます。何かこうひらめくことが多いです。

この歩くっていうことに関してすごく好きなエピソードがあって、いろんな所で講演会する度に必ず話してます。ある工業デザイナーの人も、やっぱりアイデアを作る時は歩くと言ってましたね。その歩き方がなかなか徹底してるんですよ。裸足の状態で、家の至る所を歩くんですよ。廊下歩いて2階に行ったり上に行ったり裸足の状態で歩く。何も出てこなかったら今度は靴下を履くんだそうですね。靴下履いてまた家の中をぐるぐるぐるぐる歩き回って、

でもやっぱり何も出てこないときは、今度は靴下の上からスリッパを履く。スリッパ履いて家の中ぐるぐるぐるぐる歩くとか何かしらちょっとしたアイデアぐらいは出てくるそうなんです。でももっともっというアイデア欲しい場合は、スリッパ脱いでサンダル履いて、家の外に出ます。それで、庭を歩き回るそうなんです。それでもアイデアが出てこない場合は、今度はスニーカーを履くそうです。スニーカー履いて、家の敷地から出るそうです。それで、近所を歩き回ると言っていました。近所を歩き回ると、また何か中ぐらいのアイデアは出てくるらしいです。もっといいアイデアがほしい場合は、今度は革靴を履くと言っていましたね。スニーカーやめて革靴を履いて、今度は近所よりもっと離れて町場に行くそうです。それでもいいアイデアが出てこなかったら、今度は一旦家に帰って自転車に乗ると言っていました。自転車をこいで、市内をグルグルグルグル走り回ると言っていましたね。すると、何かしらアイデアがポコッと出てくるそうです。もっといいアイデア欲しかったら、自転車を止めて手を上げ、タクシーを拾う。来たタクシーに飛び乗って、運転手さんに1万円を渡して、「運転手さん、これで走れるところまで走って、この場所に戻ってきてくださいよ」とお願いして、タクシーの後部座席で腕を組んでじーと考えにふけるそうなんです。さすがにそこまでやると本当にいいアイデアが出てくるとそのデザイナーさんは言っていましたね。

これ、結局何かと言うと、移動なんですね。移動してる時、なぜか人はいいアイデアに恵まれるとそのデザイナーさんは主張しています。僕も非常にそれは頷くところがありましたね。

移動するということはアイデアを小説にする上でものごく有効な手段のような気がします。僕もやっぱり移動する、歩くってということにとことんこだわって、さっきのデザイナーほどじゃないですけど、ちょっとその話をしてみましょ。

僕は自宅とは別に仕事場が漆山のほうにあります。部屋の真ん中に机を2つ置いて、中央に椅子を置いています。ここにはパソコン1台、こっちにもう1台置いて仕事してます。最初パソコン1のほうに向かって仕事してます。飽きると、クルッと椅子を回転して、今度はパソコン2のほうで別な仕事するんですよ。そんなふうにしてできるだけ仕事に飽きないようにしながらやってるんですけど、もう1つ特徴があって、電源の差し込み口、コンセントが床から取っています。なんで壁から取らなかったかと言うと、これがあると歩くのが邪魔なんです。

パソコンに向かって仕事してて、ちょっと詰まるとすぐ立ち上がってここをグルグルグルグル歩き回るようにしてるんですよ。自分の部屋の中が散歩コースなんです。わざわざ外に出て散歩するのめんどくさいんで、こういうふうになりました。意外なようでしょうけど、結構いい散歩

コースです。

あともう1つこの部屋に特徴が、部屋の中を散歩してる、やっぱりいいアイデアが何かポコッとひらめくんですね。だと、足を止めてホワイトボードにパパッと、忘れないうちにすぐメモしちゃうんですよ。そんな使い方ができるように、ここにいるんなことをメモしていくという作りにしたんですよ。メモだったらパソコンにパパッと打てば同じだろうと思う方もいますけど、これやっぱり、ホワイトボードとパソコンのちっちゃな画面では全然違いますね。おっきい紙、カレンダーの裏を貼り合わせたものでもいいですけど、おっきい紙に書くと、やっぱりちっちゃな画面で見るともいい考えが出てくる確率が高いです。経験からそれはもう確かに言えますね。

ですからホワイトボードというのは、すごく大好きなんですよ。講演する時はいつも準備してくださいってお願いしてます。講演するのも便利です。とにかく何かホワイトボードに書くのが癖になって、大好きなんですよ。

ですから、何かものを考える時はこれが1番便利だと思えます。どんなに文明の利器が進んでいるんなパソコンのソフトが出たとしても、こういう原始的なホワイトボードみたいなおっきな板というのはすごくいいと思いますので、ご活用くださいと申し上げたいと思います。

作家の経済事情みたいな話をちょっとしてみます。「作家って儲かるの?」と、単刀直入にこう聞かれることありますね。「そもそも、そんな物書きで食べていけるんですか?」と心配されることもあります。その問いに対する答えはたった1つですね。「それは作家によりますよ」と答えるしかないんです。本当に売れてる作家さんはとんでもない大富豪ですし、収入もバカバカあって、毎日銀行から預金のお誘いがある、電話があるような方いますし、その反対に全然売れてない作家さんの中には、ホームレスになっちゃったという例を聞いたことがありますね。家も失っちゃって、本当に途方に暮れた人もいたみたいです。でもその人は今ちゃんと復活して、家も家族も取り戻してちゃんとやってるみたいです。

それで、僕の場合は正直申し上げると、辞めてこの商売に転職したばかりの頃は、ほんとに貧乏でした。やっぱりまだ全然無名ですし、仕事も新人賞をもらえた出版社1社からしかこないわけですから。新人賞を獲ってデビューしたばかりの年はものすごい貧乏で、多分収入なんかも数10万円しかなかったんじゃないかと思えますね。

でも2008年に『傍聞き』という作品が出まして、その『傍聞き』が2011年に文庫になってますよね。これがすごくなぜか売れて、サラリーマン時代の収入を今の仕事で超えることができました。この2年後に『教場』が出て、これも売れたので人並みにやっていけるようになってます。『教場』ぐらい売れる本をあと4冊から5冊ぐらい書かないと、ほんとに大金持ちだというのは全くの誤解ですので、それだけは申し上げておきたいと思えます。作家の収入の話でした。

作家の収入は大きく分けて2つです。1番ポイントは、原稿料というのがあります。原稿を書けば、印税。これが作家の大きな収入源ですね。今やってる講演会の講師をやった時の謝礼なんかも収入になりますけど、おっきなものでしたらこの2つです。

それで原稿料、例えば1万字の原稿書いたぞ、だから1万字分の原稿料くださいよと言っても出版社は払ってくれません。1万字だと大体400字詰め原稿用紙に換算すると、30枚ぐらいなんですよ。だから、原稿用紙30枚分の原稿料をお支払いしますよという形が入ってきます。しかも、作家によっても原稿料は変わってくるんですよ。例えば、昨日今日新人賞受賞したばかりのペーパーの新人がA社で仕事した場合、3,000円



ぐらいしかももらえないと思います。B社だったら4,000円、C社だったら5,000円と、ペーパーの新人は安い。反対に、大家の北方謙三さん、宮部みゆきさん、東野さん、ものすごく売れてる人なんかは、大体ベストセラーの人は、多分5,000円から10,000円ぐらいなるかもしれません。

それで印税のほうは、例えば1,000円の本を1冊印刷してもらえると、作家にはその10%の100円が入ってくるんですよ。大体印税は10%って決まっています。ですから1,000円の本を1万部刷ってもらったら、100万円の収入が作家に入ってくると。大体作家の懐事情はこんなところですね。

最後に小説の話をちょこっと簡単にしてみたいと思います。こういう話があるんですよ。テーブルです。舞台はアメリカです。日本から銀行の頭取とその人の通訳がアメリカの遠い会社に行きました。そして会社の会議室で日米の顔合わせがありました。ここにアメリカ企業の社長さんがいる。最初にこの会議に先立って社長さんが挨拶をしたんです。「頭取さん、日本からはるばるよくいらっしやいましたね」アメリカ人ですから、挨拶した後は必ずジョークを言うんですね。それがアメリカの流儀です。それで社長はジョークがおもしろかったの、アメリカ人の人はみんな「ワハハハ」と笑いました。通訳の人も「あはは」と笑いました。でも日本人の頭取だけは、この社長さんが言ったジョークの意味がわからなくて、1人笑えないでいたんですよ。それを見た社長さん、通訳の人に、「通訳さん、頭取さんが笑えないから、今私が言ったジョークの意味を解説してやってください」とお願いしたんですよ。それで通訳が、日本語でペラペラペラペラと。すると頭取は、やっと「わはは、あはは」大笑いしました。社長さんはそれを見て、ああよかった、私の言ったジョークが頭取さんを笑わせたな、よかった、よかったと思った、という話があります。

今、皆さん思ったでしょう。それはなんのこっちょと。ふうん、で終わる話ですね。一体僕は何を言いたいんだと思ったでしょう。ちょっと今の、僕が言ったことを覚えておいてください。

ところが、この話には裏があったんですよ。もう勘のいい人だったらおわかりになったと思います。アメリカ人の社長が通訳の人に「通訳さん、私が言ったジョークの意味を頭取さんに説明してください」と言いました。この時、この通訳、さっき笑いましたけど、この通訳は社長のジョークを実は全然理解していなかったんですよ。じゃあなんで笑ったかって言うと、周りの人がみんな笑ったからです。周りの人がみんな笑ったので通訳も仕方なく、笑わないと恥ずかしいから自分も「ワハハ」と笑ったんですよ。実はこの裏でそういうことが起きてたんですよ。

にもかかわらず社長から言われてしまったわけですよ。このジョークがどういうふう面白いのか頭取さんに説明してくださいよと頼まれてしまったので、その時通訳、ものすごく困ったわけですね。それで困った末どうしたかと言うと、頭取に日本語で言いました。「頭取さん、すいません。実は僕はなんにも理解してないのに、みんなが笑うもんだからわかったふりしてさっき笑ったんです」と日本語でペラペラペラペラ説明しました。それを聞いた頭取は「なんだ、通訳くん、そういうことだったのか。わははは」と笑ったんですよ。それを見てアメリカの社長さんは「おお、私のジョークはこんなにおもしろかったのか。よかった、よかった、言ったかいがあったか」と思ったわけなんですよ。

ですから、何を言いたかったかと言うと、こういうことを小説にしたいないつも思ってるんですよ。小説の前半ではこういうこと書きます。こういうことを読者に見せるのがいいと。ところが後半を読んでもたら、前半で見

た、読者が「こうだ」と思った出来事が、後半に行ったらもうすべてがガラガラガラガラと崩れていくと。実は全然自分が見てたものがそういうものじゃなかったんだと、後半に至って初めてわかって驚く、みたいなね。

僕がミステリー小説というジャンルに求めているのはこういう驚きなんですよ。ちょっと言葉で説明するのは難しいのでこういう例え話を使いましてけど、いつもこういう驚きを小説で表現できたらなと思っています。ご清聴どうもありがとうございました。

退会のあいさつ



武田 朋広 会員

1年半という短い間ではございましたが、歴史と伝統のある西ロータリークラブのほうに入会させていただきまして、大変感謝しております。今回、鶴岡の本部に転勤になりました。また山形に帰ってくることもあるかと思っておりますので、その節には、引き続き、ご支援いただきたいというふうに思います。本日は誠にありがとうございました。

山形イブニング RC あいさつ



三澤 徳真 さん

山形イブニングロータリークラブ、本年度会長を仰せつかっております三澤徳真と申します。日頃のイブニングクラブ事業・運営活動等に関し、多大なるご理解、ご尽力を賜り、重ね重ねになりますが、心より御礼を申し上げたいと思っております。

今日はイブニングクラブ、9名の参加させていただいております。この参加に関しての経緯をちょっとお話しさせていただきますと、本年度IMが我々イブニングクラブの主幹クラブということで、半年くらい前から準備のほうを進めてまいりました。その中で今日の講演の長岡先生のほう、基調講演ということで企画させておりましたが、コロナにより中止ということになりまして、残念ながら講演が聞けなかったという経緯がございます。クラブの声といたしまして、長岡先生の講演聞きたいなという声が多かったもので、そんな中で、西クラブさんで講演会があるということをお聞きして、是非、参加させていただきたいという旨伝えましたら、快諾をいただきまして、今日、参加という形になりました。非常に講演のほう、楽しみにしておりますが、なかなか西クラブさんの例会に参加できるなんてことはありませんので、皆さまの例会、またロータリアンとしての心意気等々学ばせていただき、クラブに持ち帰ればというふうに考えております。

西クラブ様の更なるご繁栄、ご参会の皆さまのご多幸、ご隆盛を御祈念申し上げます。簡単ではございますが、御礼の挨拶とさせていただきます。

本日出席 (3 / 22)	会員総数	出席会員数
	101名	45名